



立野ダム本体着工に抗議

～立野ダムで災害が発生した場合、国は国家賠償法に従い責任を取ること～



立野ダム本体着工抗議集会 2018.8.5

8月5日、立野ダムの本体工事起工式の会場前で行った抗議集会には、流域から住民や県議、市町村議など150人が参加。「危険な立野ダムを造るな」「立野ダムより河川改修を進めよう」などのシュプレヒコールを上げました。

立野ダムは、建設予定地が崩れやすい火山性の地質であること、活断層が存在する地帯であること、洪水時に流木や土砂によりダム下部に設けられる幅5mの穴がふさがり洪水調節できなくなること、ダム満水時に土砂崩壊が起こればダム津波が下流を襲うなどの危険性が指摘されてきました。そのことは、

国土交通省も当然想定しているはずですが、ところが同省は、そのような事態を「想定」していない姿勢を取り続けてきました。

私たち流域住民は、立野ダムが災害をひき起すことを想定し、2013年10月から今年1月まで9回にわたり国土交通省に公開質問状を提出し、立野ダム説明会の開催を求めてきましたが、同省は「回答せず」「説明せず」の姿勢を貫き通してきました。

私たちは白川流域の安全を守る立場から、災害をひき起こすことが十分に想定される立野ダム建設にこれからも断固反対するとともに、国土交通省及び熊本県に対し以下のことを強く要請する申入れ文を、8月4日に内容証明で郵送しました。



国交省へダム本体着工反対申入れ 2018.7.24

1. 立野ダムは流域を災害から守るどころか、流域に災害をひき起すことが十分に想定される危険なダムであり、ダム本体工事を即時中止すること。河川整備の実施と維持管理で白川の洪水を防ぐことは可能であり、引き続きその充実と維持管理に努めること。
2. 立野ダムが建設され、完成後に立野ダムによる災害が発生した場合、十分に想定されていた災害であるので、国家賠償法第2条に従い責任を取ること。

西日本豪雨災害視察報告～それでも立野ダムを造るのか？

今年7月、記録的な豪雨により西日本各地で大変な災害が発生しました。私たちは8月に、西日本豪雨災害の現地を調査して、被災された住民の方々の話を実際に聞きました。そのことをもとに、立野ダム建設について考えたいと思います。

●肱川(愛媛県)のダム災害



野村ダム直下の地区での聞き取り 2018.8.17

8月17日、緊急放流により流域に大きな災害をもたらした愛媛県・肱川の野村ダムと鹿野川ダムを現地調査しました。想定以上の降雨でダムが満水になると、ダムへの流入量をそのまま下流に放流するしかなくなり、洪水調節できなくなるばかりか、下流の水位は一気に上がり被害を拡大します。

野村ダム直下の野村地区では、7月7日午前6時半頃から洪水水位が一気に3mも上昇して、5名の住民が死亡。過去、度々浸水していた野村地区の三嶋神社周辺では、野村ダムができたことで安心してた多くの住宅ができたのが、軒並み住宅の屋根まで

浸水しました。鹿野川ダム下流の大洲市でも4名が亡くなりました。

ところが、国土交通省四国地方整備局は7月11日に記者会見し、野村ダムと鹿野川ダムの放流操作について「適切だった」と説明。鹿野川ダムは、安全とされる基準の6倍に当たる最大毎秒約3700トン放流したのに、「想定外の雨量だった」「操作規則に基づき対処したので適切だった」としています。

当局は、満水になるまでダムで洪水を溜め込み、避難する時間を確保できるとの見解ですが、野村ダムが洪水をため込んでいたのは真夜中（午前2時から5時頃）でした。豪雨でダム放流のサイレンや防災放送も聞こえない中、住民はダムの情報を知ることができませんでした。

野村ダムの流入量と放流量の記録を見ると、ダムがなければ約5時間で徐々に増水したのが、野村ダムがあったために、ダム満水後の緊急放流で急激に増水したため、避難する時間さえありませんでした。

このような危険性を、ダムを建設する前にも建設後も国土交通省は住民に知らせようとはしません。だから、今回のような悲劇が生じるのだと痛感しました。

●小田川(岡山県倉敷市)の堤防決壊

8月7日、堤防が決壊して51名が死亡した小田川を現地調査しました。国土交通省は、当たり障りのない説明しかしませんでした。地元住民は「7月7日の堤防決壊時、小田川の河川敷はジャングルのような樹木でぎっしりとおおわれ、洪水の流れを阻害したことが堤防決壊につながった」と訴えました。また、支流（高馬川など）の堤防が貧弱で堤防の高さも小田川よりも低く、支流の堤防決壊が小田川の堤防決壊につながったとの指摘もあります。

河川を堤防で囲めば土砂が堆積するので、それを撤去するのは当然です。河川管理で最も大切なことがなされていなかったのです。今回の災害直後から、小田川の河川敷の樹木伐採と土砂除去が、国交省により急ピッチで進められています。そのスピードには驚くばかりです。なぜ洪水が起こる前になされなかったのでしょうか。

小田川流域は過去に何度も浸水被害を受け、今回の被災は十分に想定できました。また、河川整備計画にも位置付けられた小田川・高梁川合流部の付替え工事は、全くの手つかずでした。その工事が実施されていたなら小田川の洪水水位は約 5m も下がり、今回の被災は明らかに防げていたはずで

す。小田川の本川である高梁川には、多くの治水用や発電用のダムが建設されていますが、高梁川沿いの国道も浸水するなど、流域で大きな被害が出ていました。ダムより河川改修を進めるべきだと痛感しました。



小田川の河川敷で訴える住民 2018.8.7

●土砂崩壊と野呂川ダム(広島県呉市)



野呂川ダム上流の土砂災害現場 2018.8.8

8月8日、ダムへの流入量以上に放流した広島県呉市の野呂川ダムを現地調査しました。

野呂川ダムの上流と下流では、7月7日の豪雨で大規模な土砂崩壊が何箇所も発生し、ダムの上流も下流も道路が全く通れない状況でした。被災後1か月が過ぎ、ようやく自動車が通れるようになっていました。電話線なども寸断されていたようです。土砂崩壊により砂防ダムは崩れ、住宅は押しつぶされ、大量の土砂や岩石、流木等が道路や野呂川の河川敷をうずめていました。

報道によると、豪雨災害当日は2名の職員がダム事務所に詰めていましたが、土砂災害により応援の職員もダムにたどり着くことができませんでした。ダム直下の集落の住民に聞くと、ダム放流の連絡もなかったそうです。ダムによる洪水調節以前の状況だったようです。

●西日本豪雨災害から立野ダムを考える

西日本豪雨災害の死者は227名(9月6日現在)。報道によると、亡くなられた方の死因は、土砂災害(121人)、砂防ダムの決壊(15人)、小田川の堤防決壊(51人)、川に流される等(10人)、肱川のダム放流による増水(9人)などとなっています。今後新たにダムを造り、これらの人々を救うことはできません。

「想定外の災害に備えて立野ダムが必要」と考えている人もいますが、想定以上の降雨でダムが満水となれば洪水調節できなくなります。また、想定以上の降雨でなくても、幅5mしかない立野ダムの穴が流木等でふさがり洪水調節できなくなることも十分想定できます。

これまで行政は、計画規模以上の降雨の場合、「想定外」ということで責任を逃れてきました。ところが近年、異常気象で「想定外」の災害がひんぱんに起こるようになり、「想定外」が想定外ではなくなりました。「何年に一度」という計画規模があてにならなくなった近年の豪雨を考えると、ダムは洪水調節で有効な選択肢どころか危険です。

2012年7月12日の九州北部豪雨をみても、白川流域で死亡・行方不明となられた25名は、全て阿蘇地域での土砂災害によるものです。下流域で浸水被害を受けたのは、熊本市の龍田地区や黒髪地区など、河川改修がなされていなかった地区ばかりです。白川流域で求められる災害対策は立野ダムではなく、土砂災害対策と河川改修です。

●立野ダムをめぐる動き 2018年7月～11月

- 2018年7月7日 熊本市黒髪地区で立野ダム学習会（黒髪連絡会主催）15名参加
7月14日 白川改修現地見学会（東区住民の会主催）15名参加
7月22日 立野ダムと白川の安全を考えるシンポジウム 熊本県民交流館パレア 230名参加
7月24日 国交省にダム本体着工断固反対の申入れ 国交省立野ダム工事事務所 22名参加
7月29日 立野ダム見学会（大津町主催）
8月5日 立野ダム本体着工抗議集会 南阿蘇村立野ダム建設現場前 150名参加
8月6日～ 西日本豪雨災害現地調査（桂川、小田川、野呂川、肱川）
10月23日 立野ダム問題学習会（菊陽町の会主催）菊陽中央公民館 30名参加
10月24日 学習会 危険な立野ダムは建設中止を！（いのちネット主催）パレア 60名参加
11月10日 学習会 西日本豪雨と国の破堤防止対策（阿蘇自然守り隊主催）南阿蘇村 22名参加
11月14日 学習会 立野ダムは本当に住民を守れるか（中央区の会主催）パレア 20名参加
- ◎今回も多額の会費・カンパご納入に感謝致します。領収証は振込用紙の受領証に代えさせていただきます。

●大熊孝・新潟大学名誉教授講演に230名参加



大熊孝・新潟大学名誉教授の講演 2018.7.22

う。堤防や遊水地の整備による治水対策が安全でコストも安い」と強調しました。大熊先生の講演動画、資料などは、当会ホームページで見ることができます。

講演に先立ち大熊先生は、白川改修の状況や、横ずれ断層が走り兩岸のいたるところが土砂崩壊を起こしている立野ダム建設予定地を視察されました。

7月22日の九州北部豪雨6周年「立野ダムと白川の安全を考えるシンポジウム」では、大熊孝・新潟大学名誉教授（河川工学）が講演。熊本県民交流館パレアにて230名が参加しました。

大熊先生は、「想定外の豪雨は今後も繰り返される」と指摘。西日本豪雨で愛媛県の肱川がダム放流により氾濫して大規模な浸水被害が発生したことについて、「ダムは想定した治水能力を超えると危険が伴



立野ダム予定地を視察する大熊先生

編集後記 今年の夏は酷暑が続き、少雨で白川の水位も下がり気味でしたが、大甲橋から下流を見て驚きました。以前はなかった「中州」があちこちに見えていたのです。白川をよく見ると、ほとんど川全体で火山灰がたまって川床が上昇しています。九州北部豪雨後、白川では河川改修が大幅に進みましたが、いくら川幅を広げても、堤防をつくったりしても、河床にたまった土砂を撤去しなければ川の流下能力は下がります。河川を堤防で囲めば土砂が堆積するので、それを撤去するのは当然なのに、それを放置して国交省は立野ダム建設を推し進めています。地道な河川の管理をおろそかにして、なぜ巨大事業ばかりを進めようとするのでしょうか。災害を防ぐために白川で今必要なことは、上流域では土砂災害対策（荒れた人工林の間伐や阿蘇の草原の保全）、中流域では河川改修、下流域では川床にたまった火山灰の撤去です。12月9日の大津町での集会に是非ご参加ください！（N.O.）